

2022年11月27日（日）主日朝礼拝説教

『光と闇の物語』 井上隆晶牧師  
創世記1章1～5節、ヨハネ福音書1章1～5節

## ①【創世記とヨハネ福音書】

創世記とヨハネ福音書の冒頭は、いずれも「初めに」という言葉から始まっています。創世記は「初めに、神は天地を創造された。地は混沌であって、闇が深淵の面にあり、神の霊が水の面を動いていた。神は言われた。『光あれ』こうして光があった。」（創世記1:1～3）とあります。一方、ヨハネ福音書は「初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。…万物は言によって成った。…言の内に命があった。命は人間を照らす光であった。光は暗闇の中で輝いている。」（ヨハネ1:1～5）となっています。この二つの書はとても良く似ていると思いませんか？「初め、創造（成った）、闇、光」この四つの単語がどちらの書にも出てくるのです。ヨハネはもちろん創世記を知っていました。考えられるのは、ヨハネが創世記にイエス様の事を書き加えて、新しく書き直したということなのだと思います。創世記で、天地を創造されたのは実は、御子キリストであって、世界の初めは混沌としていて、闇が深い淵の面を支配していたけれども、神の聖霊と神の光であるキリストによって、世界は秩序と平和が与えられていったのだ、ということなのだと思います。

## ②【光と闇】

創世記の時の「混沌」と「闇」というのは、まだ人間が墮落する前のものでした。しかし教父たちは神が創ったものに「混沌」はありえないから、1節と2節の間に天使の墮落があったと解釈しました。1節で天（天使の世界）と地（この世）が造られ、2節からはこの世の事を書いているというのです。だから、エデンの園に地に落ちた悪魔が蛇の姿で登場してくるのだと解釈しました。しかし神の霊と、光であるキリストが地上に秩序と調和を与えていたのです。ところが人間は悪魔に騙されて墮落し、神から離れましたから、再び混沌と闇がこの世を支配するようになったというわけです。

ヨハネ福音書は、単なる「闇」としてではなく、光であるキリストに敵対するものとして「闇」というものを書いています。「光は暗闇の中で輝いている。暗闇は光を理解しなかった。」（ヨハネ1:5）、「私は世の光である。私に従う者は暗闇の中を歩かず、命の光を持つ。」（同8:12）「暗闇に追いつかれないように、光のあるうちに歩きなさい。」（同12:35）という言葉もそれを現わしています。ところでヨハネ福音書にはクリスマスの物語が出てきません。マタイ福音書とルカ福音書だけにクリスマス物語が出てくるのですが、そのどちらも「夜」を舞台とした場面が多いのが分かります。ヨセフへの夢のお告げも夜ですし、東方の学者たち

の旅も星に導かれた夜でしたし、羊飼いに天使が告げたのも夜でした。それは「暗闇と混沌に覆われた世界」の中に、「まことの光」としてキリストが来たことを告げようとしているのです。

### ③【アドヴェントの過ごし方】

イエス様の降誕を記念するクリスマス前の四週間は「アドヴェント（待降節）」と呼ばれます。もともとは「冬のレント」と呼ばれ断食と節制の時でしたが、だんだんと喜びと楽しみにあふれて主の降誕を待つ時となり、同時に「再臨のキリスト」を待ち望む時ともなってきました。このアドヴェントの時、私たちはどのように過ごせば良いのでしょうか。私たちは毎日、この世界で繰り返されている戦争、紛争、分裂、疫病、飢饉、災害などのニュースを耳にします。光より闇の方が強く、命より死の方が強く、希望より絶望の方が強いのではないかと、闇こそがこの世界の「主人」であるかのように思う時もあります。人間はそのような「闇」に対抗するため「人工の光」を造り出そうとしてきました。科学技術の進歩、医学の進歩、は年々進んでいます。月にはロケットではなく、やがてエレベーターで行けるとまで言っています。でも最近、多く与えられることは本当に祝福なのだろうか？と疑問に思うのです。多くのものが与えられても人間は正しく管理できないからです。長生きが出来ても文句ばかり、いくら多くの物を手に入れても満足できない、機械が発明されて生活が楽になったら成人病になる、戦時中は貧しかったのに子たくさん、戦後は豊かになったのに少子化、本当に人間の造り出す「人工の希望の光」は何か歪んでいる、と思います。

ヨハネはイエス様の事を「その光は、まことの光であって、世に来てすべての人を照らすのである。」（ヨハネ 1：9）と書きました。「まことの光」と呼んだということは「偽りの光」が世にたくさん出て来ているからです。私たちに必要なのは、何か新しい光を造り出すことではなく、聖書が語る「まことの光」（ヨハネ 1：9）に立ち帰ることではないでしょうか。つまりイエス・キリストという光に帰ることなのです。

●臨床心理学者の河合隼雄（かわい はやお）さんが本の中にこんなエピソードを載せています。「何人かの人々が漁船で海釣りに出かけ、夢中になっているうちに、みるみる夕闇が迫り暗くなってしまいました。あわてて帰りかけますが潮の流れが変わったのか混乱してしまって、方向が分からなくなり、そのうち暗闇になってしまい、都合の悪いことに月も出ていません。必死になって松明をかかげて方向を知ろうとしますが見当がつかません。そのうち、一同の中の知恵のある人が、「灯を消せ」と言いました。言われる通り消すと、あたりは真の闇となりました。しかし、だんだん目が慣れてくると、まったく闇だと思っていたのに、遠くの方に浜の町の明かりが見えてきました。そこで帰る方向が分かり無時に帰って来たというのです。」

自分の灯というのは自分のもっている知識とか、今までの経験とかでしょう。どうしてよいのか分からない時は、一度、自分の持っているものを手離してみると

いることが必要なのです。意外と、闇の中に輝いている光を見つけることができるのではないのでしょうか。

●近江八幡市の大中の湖干拓地で、クリスチャンの弓削田清弘（ゆげた きよひろ）さんは、ぶどうの栽培をしています。最初、琵琶湖周辺の肥沃な土地でぶどう栽培をしましたが、樹ばかりが太く育ち、枝と葉が茂って、よい実ができませんでした。ぶどうは荒野に育つ植物だからです。そこで「根域制限栽培」という、根を狭い箱のような枠に入れる栽培方法にたどりつきます。ぶどうは、窮屈で水や栄養が乏しい状態にしてやると、とても良いぶどうになったそうです。ぶどう園を始めて五年ごろ、5月に外出していてハウスの温度管理ができず、芽が焼けてしまいました。室温は50度以上になって、伸び始めていた芽がぜんぶ駄目になりました。翌年も、そのまた翌年も芽が出ても縮れてしまい、うまく育ちません。ぶどうも焼けた記憶があるのか、縮こまってもよく育たないのです。困り果てて、いろんな研究所や栽培経験者に相談しても答えがありません。ある時、農業仲間から「リセットしてみたら」と言われました。そこで根元から数十センチを残して、その上を全部切り取って見たのです。根しか残っていません。すると、切り株の周りから芽が出て来て枝となり、それが太くなって幹のように変わり、切った部分を覆うように上に伸びて行ったのです。そして元通り、いやそれ以上の立派なぶどうの樹に成長したのです。それからは毎年、たわわに甘い実をつけています。

神様もイスラエルを何度もリセットされました。「エッサイの株からひとつの芽が萌えいで、その根からひとつの若枝が育ち、その上に主の霊がとどまる。」（イザヤ 11：1）ダビデ王朝を切り倒し、その子孫であるイエス様の上に聖霊はとどまりました。大木（大国）に主の霊がとどまったのではないのです。切り倒された株から出た若芽に主の霊がとどまったのです。もう終わりだと思った時、そこから新しい命が始まったのです。キリストの復活とはそういうことです。私たちも同じです。私がこの教会に来た時、信徒は二人だけで、信仰の灯は消えそうでした。やがて二人共来なくなり灯は消えたかと思いました。しかしその時、教会はリセットされたのだと思います。主の霊がとどまったのです。都島教会は狭く、貧しい教会です。「根域制限栽培」をさせられているのです。人生をリセットする、そして狭い、不自由な状態に自分を置くことが良い実を結ばせるのです。それこそ主を待つ、私たちのアドヴェントの生き方なのです。